

伏見城の血天井

本堂の廊下の上の天井は普通ではない。この天井には、侍の血がしみついた伏見城の床板が使われているのである。16 世紀の侍たちによる覇権争いの中で起きたある重要な事件において、数百名の武士たちが包囲され、自害した。

1600 年に侍の鳥居元忠（1539～1600 年）と約 2000 人の武士たちが、石田三成（1559～1600 年）が率いる圧倒的な数の軍勢に包囲されながら、城を守ろうとした。絶望的な状況になると、鳥居とその部下は敵によって斬首されるという不名誉を避けるために切腹した。鳥居の抵抗により、その君主である徳川家康（1543～1616 年）は態勢を立て直すための時間を稼ぐことができ、のちの決戦、1600 年の関ヶ原の戦いで勝利をおさめることができ、日本の歴史の流れを変えた。徳川は日本の統一を完成し、江戸時代（1603～1867 年）を通じて日本を統治することになる徳川幕府を創設した。

伏見城の床板は、鳥居の守備隊の英雄的な活躍を記念するものとして、この寺の天井に組み込まれた。血の痕跡から、研究者は約 380 人がこの床板の上で死んだと考えている。本堂への入り口を入ったすぐのところの天井をよく見ると、鳥居本人の体と顔のあとを見ることができる。